



## 第82回

### 難民企画・未来奪われた元子ども兵

※2024年11月の毎日新聞記事を元にした文章と地図です。

校閲し、直すべきところを指摘してください。

1 / 2

アフリカ最大の難民受け入れ国・ウガンダは、自国でも内戦に伴う殺りくや略奪に一般の人たちが苦しんできた。とりわけ残酷な行為を繰り返した「神の抵抗軍（LRA）」と呼ばれる武装勢力は、国際社会から強い非難を浴びた。子ども兵として人生の大半をLRAの加害行為に加担させられた男性が凄惨な体験を告発する。

「彼らのせいで人生を台無しにされた。未来を奪われた」。ウガンダ南部の都市グルにある職業訓練施設に通うボスコさん（43）は怒りを込めて語る。8人きょうだいの4番目として、北部ランウォ県で育ち、将来の夢は学校の先生になるか小売店を開くことを夢見ていた。

2人の兄とともにLRAに誘拐されたのは14歳だった1995年。捕らえられたボスコさんらを含めた何百人もの若い男女が、南スーダンまで数日間歩いて連行された。

LRAは南部の民族主体のウガンダの政権に対し、北部の民族が80年代後半から起こした反政府運動をルーツとする。兵力確保や性的奴隷とする目的で子どもを誘拐を繰り返したり、協力的な住民を虐殺したりして次第に衰退。誘拐された子どもは推定3万8000人以上とされ、幹部の一人は人道に対する罪などで国際司法裁判所（ICC）から有罪判決を受けた。連行先の南スーダンでボスコさんは銃を持たされ、射撃訓練を強制された。

訓練を受けた後はウガンダや南スーダンなどを点々とし、戦闘や略奪、誘拐を強いられた。「殺される恐怖のあまり、従わざるを得なかった」。一緒に連行された11歳年上の長兄スイストさんは戦闘で犠牲になったと聞いた。

それでもボスコさんは「彼らへの抵抗の意思を失ったことは一瞬たりともない。命令を守るふりをしながら人を殺すことは避け、可能なら捕虜を逃がした。自分なりのせめてもの正義の行いだった」と振り返る。

LRAが統制を失っていた2018年、自分と同じ境遇の兵士やその家族ら約50人で脱退。コンゴを経て、20年、中央アフリカ共和国に移り住んだ。本当はルワンダに戻りたかったが、処罰を恐れた。

そんな中、LRA元子ども兵の動員解除や社会復帰支援に現地を取り組む日本のNGO「テラ・ルネッサンス」（東京都）のサポートを受け、23年9月、約20年ぶりに帰郷を果たした。「高齢の母と

も再会でき、互いに号泣して喜びを分かち合った」と言う。

現在はグルにあるテラ・ルネッサンスの職業訓練施設で木工家具製作を学んだり、英語の識字教育を受けたりしている。同じようにLRAに誘拐された妻ルーシーさん（32）や、2〜13歳の子ども4人との一家6人で暮らす。

「子どもたちに教育を受けさせ、土地を買って自分の家を建てたい。そして、持参金を支払って（内縁の）ルーシーと正式に結婚したい」。奪われたかけがえのない時間を懸命に取り戻そうとしている。

◎ウガンダと周辺国の地図

